実践事例

中３　俳句を作って、句会を開こう

研究主題　「確かな国語力を育むための国語教育のあり方」

～効果的な言語活動を取り入れた授業実践の工夫～

日立市立平沢中学校　教諭　髙野　都

Ⅰ　はじめに

「人は言葉で作られる。人は、名付け、そうすることで事物に生命を吹き込み、その言葉で思考する。豊かで美しい言葉、知性と品格のある人間になるために国語科がある。」これは、国語科学習学年当初のオリエンテーションで必ず伝えていることである。豊かな人間性を培う思考力や想像力は、言語を手がかりとしながら論理的に豊かに思考、想像する力であり、言語を通した関わりの中で互いの立場や考えを尊重し合うための表現、言語能力を育成することは、国語科における教科目標の根幹である。

さらに、言語活動について、「国語をはじめ各教科等において、言語活動の充実を図るよう定めているが、このことは、言語活動が、論理や思考などの知的活動やコミュニケーション、感性・情緒の基盤となるものであり、子どもたちの思考力・判断力・表現力等を育むために有効な手段であることを示したものである。」と学習指導要領にあるように、また、新学習指導要領に向けた「論点整理」におけるアクティブ・ラーニングの視点「主体的、対話的で深い学び」の実現においても、言語能力がすべての下支えであることが容易に理解できる。複雑化された社会、予測不能な社会をかかわりの中で豊かに生き抜くための学び、新たな学びに向かうために必要不可欠な能力であり、国語科として、そういった言語の素地を培うことの責務は非常に大きい。まさに、日本人としてのアイデンティティ、日本人を日本人たらしめる教科であると心得る。

以上を踏まえ、指導事項との関連及び生徒の発達の段階や言語能力を把握し、言語活動を適切に位置付け、授業に効果的に取り入れた上で、構成や指導の在り方を工夫・改善していく。

Ⅱ　研究の仮説

1　吟行（修学旅行）での句作による句会を開くという目的を明確にすることで、俳句の可能性や魅力に気付き、主体的に学習に取り組むであろう。

2　「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を連動させた言語活動を取り入れることで、俳句を鑑賞する力が育つであろう。

Ⅲ　実践事例

1　学習指導案

(1)　題材　夏の句会を開こう（俳句を作って、句会を開こう）

(2)　本時の目標

・互いの俳句を読み合い、表現技法や視点の良さを明らかにして評価する。

（話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと）

・和語、漢語、外来語のさまざまな季語や、俳句の定型に注意し、句作を通して五感を磨く。

（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

(3)　単元について（男１５名　女１１名　計２６名）

本単元は、１学年での詩、２学年での短歌に引き続き、言語感覚に関わる系統立てられた教材である。鑑賞からものの見方を広げたり、表現の工夫をとらえて鑑賞したことをまとめたりして読み味わうといった、１，２学年での学習を土台として、さらに「評価」することが俳句の学習と前述の学習との大きな違いである。構成や表現の仕方を根拠とし、論理的な思考に基づいて評価する力は、３学年の発達段階として身に付けることが求められる。

また、俳句は、日本文学の最短詩型であり、こんにち日本国外でも広く受け入れられ、詠まれている、日本を代表する文化の一つである。使用する言葉を極限まで削っているため、一見簡単に見える切り詰められた言葉の世界

がどのような仕組みで成り立っているのかを知らずして、俳句を読み、味わうことは難しい。本単元における学習は、まさに、俳句の仕組みを学ぶ学習材であり、具体的な作品鑑賞を通して俳句の奥深さや豊かさに触れることができる場でもある。

３年１組は男子１５名、女子１１名、計２６名、落ち着いて学習に取り組むことのできる学級である。昨年度の県学力診断のためのテストでは、事実や事柄を明確に書くこと、自分の考えを明確に書くことは良好との結果が出た。しかし、文語文を読み取る力や現代仮名遣いに直す力は著しく落ち込み、さらに文章を推敲する力、文の表現の特徴を捉える力も県平均には及ばなかった。ここでは、古典文学の匂いのする俳句への抵抗感の払拭を図るべく、前単元の「俳句の読み方、味わい方」の学習を踏まえ、さらに吟行（修学旅行）で句作したものを中心に句会を開くことで、俳句をより身近なものとして感じさせ，生徒の学習意欲を高める。また、互いの俳句を対象に鑑賞，選評を行う言語活動を仕組み、他の俳句の評価への視点を身に付け、伝統的な言語文化への理解を深めるとともに、そのプロセスを踏むことで客観的な視点から自分の作品を振り返り、さらに表現力を高めたいと考える。今回の作品は、書写の学習につなげ、秋の文化祭に毛筆の作品として短冊にして展示する。

(4) 評価計画（１時間扱い）

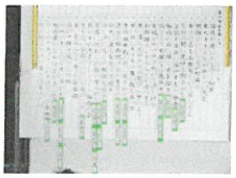
国語への関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関わる事項
・俳句に興味を持ち意欲的に句作や鑑賞に取り組もうとしている。 ・俳句を選評する中で自分とは違うものの見方や考え方に触れ，自分のものの見方や感じ方を広げようとしている。	・自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、根拠を基に説得力のある話をする。 ・会が効果的に展開するよう互いの考えを生かし合う。 ・話し合いのルールを尊重し、積極的に参加している。	・句作にあたり表現を工夫している。 ・俳句を読んで，自分が心ひかれた言葉や表現を書き表している。	・表現に注意して、描かれている情景心情、視点等を読み取っている。 ・作品のよしあしについて、根拠をもとに読み取っている。	・定型、季語、切れ字（区切れ）等、俳句の約束事や表現技法について理解している。 ・句作を通して五感を磨いている。

(5) 本時の言語活動（資料１）

教科における言語活動	【教科における思考力・判断力・表現力のポイント】 ・言葉を通して的確に理解し論理的に思考し表現する能力の育成 ・互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力の育成 ・我が国の言語文化を継承・発展させる態度の育成 【言語活動のポイント】 ・解釈、熟慮、評価のプロセスを踏む記録、要約、説明、報告、紹介、感想、討論を含む話し合い活動 ・言葉の美しさやリズムを体感する古典等の学習活動
本時で行う主な言語活動	・俳句のもつリズムを感じながら音読する。 ・日本語の美しさに触れ、それを生かした句の特徴や表現の工夫について話し合う。 ・選句の根拠を明らかにして、評価をする。 ・多様な意見を聞き、それに対して考えをもつ。 ・互いの立場や考えを尊重して話し合う。 ・聞いた情報を選択、整理して書き留める。 ・書き留めたメモをもとにして、評価・鑑賞文を書く。 ・自分の句について、再度推敲をする。

(6)　展開　　◎言語活動の充実のための手立て

学習内容及び活動	支援の手立て（個への配慮■）と評価（※）
1　学習の目標を確認する。 作品の良さを見つけて評価し合おう。	・句会に臨む姿勢が作れるよう落ち着いた雰囲気で始める。 ・全員分の俳句をあらかじめ清記したプリントを作成するとともに、評価の参考に簡単なコメントが記入できるようにしておく。
2　学習内容を確認する。 ・評価の仕方を確認する。 ・句会を開く。 ・振り返りをする。	◎句会を中心とした学習について、見通しがつくように活動内容を確認してから進める。また、互選、吟行、投句、清記等、句会に使われる語句についても簡単に触れる。 ◎初めての句会であるため、安心して選句出来るよう、評価のポイントをつかむ学習を取り入れる。
3　評価の仕方を確認する。 (1)モデルプリントを参考にし、評価のポイントをつかむ。 (2)グループでモデルの一句を評価し、根拠や手順を確認する。 評価のヒント は　はっとした感動 い　いつ？（季語） く　組み立て（五/七/五） 	◎発言のヒントが確認できるようにモデルプリントを用意する。（資料２） ◎互いに根拠を明らかにし、論理的な思考を基盤として評価できるよう、グループでの話し合いの場を設ける。 ◎客観的に作品を評価できるよう、俳句としては洗練されていない句とグッドモデルの句とをプリント資料に混在させておく。また、その視点を振り返りの時の自作の句の推敲に生かせるようにする。 ■◎自分の考えを焦点化し、言語化して評価をすることの困難が予想される生徒（中間テストで評価・鑑賞文の設問について無回答だった生徒）には、ポイントとなる季語や技法についてグッドモデルや友達との話し合いの中からキーワードを押さえるように促す。
3　句会を開く。 (1)　句会のルールを確認する。 (2)　互いの俳句を読み合う（2回）。 (3)　一人一句を選定し、その評価を発表し合う（選句）。 	・自身の句会であるという姿勢で学習に臨めるよう、進行係が中心となって学習を進める授業構成にする。 ◎句会の内容が深まるよう、話し合う隊形の距離感に配慮にすると共に、グランドルールを準備し、より良い話し合いに向けて確認し合う。 ◎言葉一つ一つのもつ意味を考えながら俳句を味わえるよう、ゆっくり読むことに留意するよう伝える。 ■◎音声だけでは情報をつかみきれない生徒には、他者の意見のポイントとなる部分をアイコンタクト等で知らせながら、補助的に板書する。 ・受容的な話し合いを促すために、作品のもつ良さやオリジナリティに気づいた発言には、大きく頷くなどして雰囲気作りをする。 ◎話し合いが通り一遍に終わらずに深め合えるよう、進行係を支援する。 ※互いの俳句について、作品の良さを見つけて評価することができたか。（発表、観察、プリント） ◎今後も俳句等日本語の美しさに親しみ、言語文化を継承・

 (4) 変更があれば評価の訂正を行う。 (5) 特選句を決める（称賛）。 (6) 総評を聞く。 (7) 句会を閉じる。	発展させる態度がはぐくめるよう、一人一人の作品にそれぞれのものの見方や感じ方、個性があり、素晴らしかったことを伝える。 ◎俳句の世界では、高得点句が名句ではないが、作者の言語感覚のすばらしさや作品の良さに気づき、それを客観性のある言葉にして評価につなげること、また、そのために自身の言葉の感性を磨き続けることの大切さを助言する。 ◎それぞれの作品を尊重した良い雰囲気で句会を終えるよう配慮する。 ■◎評価・鑑賞について文章化の困難が予想される（特に中間テストで評価・鑑賞文の設問について無回答だった生徒）生徒には、メモをしたポイントとなる季語や技法を根拠として評価文に繋げるよう、個別に机間指導する。
4　振り返りをする。 ・メモ等を参考にして、選句した作品の評価・鑑賞文を書く。 ・自分の句の推敲をする。	◎余力のある生徒には、自分の句についてさらに工夫し、より良い俳句として作品を仕上げるよう、推敲を促す。 ※和語、漢語、外来語のさまざまな季語や、俳句の定型に注意して、句作を通して五感を磨くことができたか。 （発表、観察、プリント）

Ⅳ　研究の成果

1　仮説１について

清句による句会は、生徒にとって誰だかわからない目前の作者の俳句に込められた思いや意図に自分の感じ方や考え方を重ねるといった、ある種の緊張や読み解きへの期待のこもった高揚感があった。吟行（修学旅行）という同じ状況下にありながら視点の異なる、あるいは、同じ視点でも言葉の用い方の異なる様々な句を選評することを通して、他の人のものの見方や考え方に触れ，嘆声や拍手とともに自分のものの見方や感じ方を広げることができた。句会開催後、俳句の学習が終わっても、さらに作品としてよりよくしようと言葉を練るなど、粘り強く推敲を繰り返したり、図書室で歳時記などから気に入った季語を見つけて新たに作り直したりする生徒が出てきた。季語一つ、助詞の平仮名一文字で、また違った世界が広がる俳句の可能性、言葉のもつ計り知れない力を体感していた。句会で発表した句と実際に文化祭で出品した俳句とに違い（変化）のあった生徒は25名中８名（資料３）であった。この活動により，俳句の言葉、表現に着目して心情や情景を読み取ったり，簡潔な表現に込められた多様なものの見方や感じ方に気付いたりするだけでなく、それを批評することで、より効果的な表現技法、表現方法等、評価の視点を自分の句にフィードバックするといった主体的な学習ができたと考える。

2　仮説２について

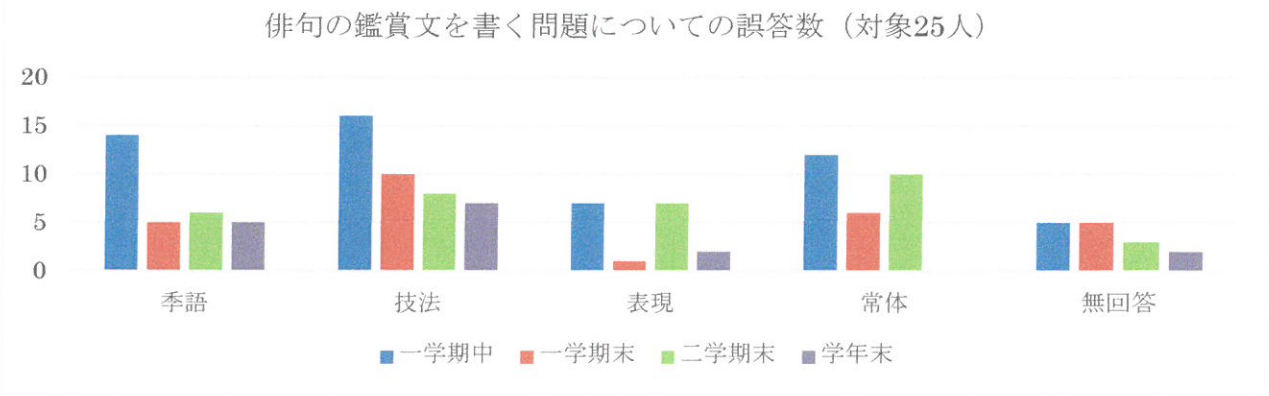
モデルプリントを使った評価のプロセスの確認では、解釈のための注目すべきキーワードや評価までのプロセスのモデルの提示により、自分が語句を選んだり並べ替えたりするときの視点を生かしながら考えることができた。また，個人の意見は尊重しつつも、互いに根拠を明らかにし、論理的な思考を基盤としてグループとしての作品の批評する話合いを通して，思考力や判断力の育成につなげた。俳句を読み取り、話し合い、考えをまとめて書くといった一連の言語活動を一時間の学習活動に仕組むことで、どのような視点、考え方、表現の仕方で鑑賞、評価につなげるかを、個⇔グループ、個⇔全と反復しながら理解につなげることができた。

４回の定期テスト（一学期中間、一学期期末、二学期期末、学年末）において、様々な俳句の中から選択評価・鑑賞を書く問題については、この学習以降に伸びが見られた。設問は、既習・未既習に関わらず様々な俳句に焦点を当て出題した。鑑賞文中において「季語は○○、季節は○○である」という季節にまで言及

できていない場合には正答とはしなかったが、無解答を除いて解答者全員に季語の把握ができていた。また、切れ字「や」や「かな」等の古語を積極的に取り入れて句作を繰り返したことで、「万葉集、古今和歌集、新古今和歌集」「おくの細道」の題材にも、学び合いによる学習活動を中心に主体的に取り組む様子がうかがえた。県学力診断のためのテストの正答率において、現代仮名遣いに直す力：－19.7（H27）→＋1.6（H28）、文語文の会話についての理解：－12.0（H27）→+2.5（H28）と改善が見られ、古典への抵抗感の軽減、理解への効果があったと考えられる。また、俳句を鑑賞する力については、正答率＋17.1（H28）と県平均を大きく上回ることができた。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を連動させた言語活動を土台に、鑑賞・評価の学習を繰り返すことで、俳句を鑑賞するための一定の力がついたと考える。

俳句の評価・鑑賞における誤答数（２５人）

テスト	一学期中間	一学期期末	二学期期末	学年末	傾　　向
季語	14	5	6	5	季語は選べたが季節までは言及できていない
技法	16	10	8	7	切れ字、体言止め、比喩等に触れていない
表現	7	1	7	2	内容、心情に触れてはいるが主観的表現に留まる
語体	12	6	10	0	常体、敬体との区別の不注意
無回答	5	5	3	2	書くことへの苦手意識、および、時間の不足



V　今後の課題

俳句そのものの指導に当たっては、ものの見方や考え方を知識として教え込むのではなく、生徒自身の体験や言語環境の中から感じ、学び取らせ、言語感覚を磨かせる、といった個々の内観、主観に迫る難しさがある。習得したことを活用してその課題を解決し、さらに探究するという学習プロセスを経ていくためには、指導者側にそれ以上の豊かな感性と俳句に関する深い見識がなくてはならない。教師自身の研鑽は必須であり、指導者としての重要課題である。

今回の「俳句」についての学習活動の真価が問われるのはこれからである。さらに言語活動を充実させ、生徒一人一人の日々の生活の中に生かすこと、これからの生き方の中にも汎化させていくことができるかどうかである。ここで学んだ見方、考え方を働かせ、自分の中に問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成して表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかをどの時点でどの尺度で評価するかも課題である。そのためには、他教科との関連を踏まえ、教科横断的な言語活動の明確化、あるいは国語科として培うべき力のさらなる明確化を図らなければならない。推敲を繰り返す生徒が「よい句にするのに考え始めたらきりがないな。」とつぶやいた。「けり」がつかず「かな」ばかりが増えるという、そこが俳句の世界の面白さ、学びの愉しさである。単なる知識の伝達とならぬよう、今後も、国語科としての言語活動を通して、豊かで美しい言葉、より良き日本語の使い手を育てていきたい。

参考文献：「小学校学習指導要領解説　国語編」　文部科学省　平成20年9月
「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめついて」　文部科学省　平成28年8月26日

資料3

夏の句会を開こう　上段 夏 ↓ 下段 秋　三年一組氏名

1	海原や波にたなびく桜草	海原や波にたなびく桜草
2	東大寺上をながめるいい天気	↓東大寺てっぺんの先五月晴れ
3	朝顔やいにしえの町蘇る	朝顔やいにしえの町蘇る
4	菓子の名も水無月という涼しさよ	菓子の名も水無月という涼しさよ
5	若竹の間に見ゆる朝日かな	若竹の間に見ゆる朝日かな
6	金閣を水面に溶かす走り梅雨	金閣を水面に溶かす走り梅雨
7	梅雨の日に輝く光金閣寺	梅雨の時期きらきら輝く金閣寺
8	我ひとり水鏡なる鹿苑寺	我ひとり水鏡なる鹿苑寺
9	夏風やサラサラ吹いて涼しけり	夏風やサラサラ吹いて涼しけり
10	新幹線トンネル入ると耳つまる	↓トンネルを過ぎて車窓は夏の富士
11	舞い落ちるサクラの花びら夢のよう	↓面紐をきつく結ぶや寒稽
12	寒い日にキラキラ舞い散る白い雪	↓やわらかく歌う我あり文化祭
13	青時雨無数の竹に囲まれり	青時雨無数の竹に囲まれり
14	清水の梅雨明け空の青空や	↓合唱の声伸びやかに秋の空
15	剣先に漲る気在り万緑す	剣先に漲る気在り万緑す
16	涼しげに咲くや朝顔花扇子	涼しげに咲くや朝顔花扇子
17	夏霧に隠れし比叡の重みかな	夏霧に隠れし比叡の重みかな
18	我かすめ決まりしシュート梅雨の空	我かすめ決まりしシュート梅雨の空
19	息を吸い京都のにおいと雨のにおい	↓五月雨に京の香混じりて吐息かな
20	暑い夏みんなで乗った新幹線	暑い夏みんなで乗った新幹線
21	雨の中輝き続ける竹林	雨の中輝き続ける竹林
22	竹林の差し込む光に導かれ	竹林差し込む光に導かれ
23	梅雨雲や日和坊主が並ぶ窓	↓五月雨や日和坊主が並ぶ窓
24	ホーホケキョうぐいすばりの二条城	↓古都の町透かして見ゆる雲の峰
25	雨が降るだけど暑さは夏みたい	雨が降るだけど暑さは夏みたい
26	東大寺指さす先に光り指す	↓東大寺指さす先の盛夏かな

深め合う話し合いのグランドルール

・聴き手の表情を見ながら話そう
・聴き手に届く声の大きさ、早さで話そう
・自分の考えが伝わるように話そう(言い回し・言葉の選び方・他の意見を受けた言い出し、尊重・質問)
・楽しく話し合おう

・話し手の表情を見ながら聴こう
・話し手のいわんとすることを考えながら聴こう
・自分の考えと比べながら聴こう(同じ考えだ・違う・なぜだろう・似ているがここが違う…)
・反応しよう(頷き・感嘆詞などの呟き…等)
・楽しく話し合おう

資料1

例	Good Model	Point
うまさうな雪がふうわりふわりかな　一茶	季語は「雪」で季節は冬、切れ字「かな」で下五の切れとなり、「ふうわりふわり」をそっと受け止め、余韻を残しています。実際には食べない雪を「うまそうな」とすることで、白さ、美しさ、汚れのなさを表現し、また、ゆっくりと舞い散っているように連想させます。さらに、平仮名で書くことにより一つ一つの軽さが出ているところもすばらしいと思います。読み手に心が落ち着くような印象を与えます。 中間テスト参考（天賀谷・小野・菊池・松本・山本）敬称略	

三年　組　班　氏名

							評価メモ
1	2	3	4	5	6	7	
大仏も鹿を毎日見るのかな	座して聴く風鈴やまた夏が来る	風死して京の暑さを歩き出す	かき氷友の隣でうれしいな	わちゃわちゃと夏ふくの子らあらわるる	ソーダ水京の暑さを飲み干せり	花影に雨を連れ出す蛙かな	

作品を評価しよう　三年　組　番　氏名

① 始めに、どの句について述べるのか、を言おう

例　私は△△番の句について述べます。

例　私は、○○さんと同様に△△番の句を選びました。

例　私も、○○さんと同じように△△番の句の［　　］について評価したいと思います。

② 表現の工夫を　見つけよう

（季語の使い方、切れ字、区切れ（初句切れ、二句切れ、中間切れ、区切れ無し）、擬人法、体言止め、擬態語、表記の仕方、倒置法、言葉の使い方…等々）

これには、［　　］が使われています。

また［　　］の工夫があります。

③ 表現の効果について　述べよう（リズム、余韻、感動の中心、季節）

そのために、［　　］といった効果があります。

④ 想像できること、感じたことを述べよう（作者の感動、伝わってくる情景、季節感、共感等）

［　　］が感じられて良いと評価しました。

［　　］